場所　大分県中津市

面積　0.064ha

活動目的　ベッコウトンボをはじめとした湿地に適応した生物群の保全を行う。また、地域の歴史を目の前に広がる二次的自然について学ぶ場として活用する。



サイト概要　大分県中津市と宇佐市の境界付近には、中津市側に野依新池、宇佐市側に植野池があり、どちらもベッコウトンボの生息地である。「尾無の湿地」は両池の中間にあり、ベッコウトンボの成虫にとって貴重な生息場となっている。尾無の湿地には、多い年には数百頭のベッコウトンボが見られる他、トンボ類など水辺の希少種も多く生息している。

土地利用の変遷

もともと湿田で湧き水が滲出することから生産を増やすための農業に向かず、長期間放置されていた。東と南に墓地が広がりあまり人も近づかず、不法投棄なども見られるような荒れ地の状態が数十年続いていた。近年、駐車スペースをつくるための整地作業を行ったが、湧き水が滲出したためうまくいかなかった。現在でも湧水が浸出する放棄田であるが、そこに生息する多様な生物生態系を保全する目的で、水辺に遊ぶ会が作業を行っている。また、地主から土地の譲渡を受けることが決定している。

サイト周辺の環境

周辺はいわゆる里地里山的環境であり、いくつかのため池がまとまって存在している。山側はゴルフ場になっており、戦後放置された二次林が広がる。野依新池は水生生物を中心に多数の希少種が記録されているが近年周辺環境とともに劣化が進んでいる。

アピールポイント

ベッコウトンボにとって重要な生活の場であるだけでなく、生息環境の悪化が続いている両生類にとっても残された貴重な場所となっている。周辺部は、昔ながらの土水路が広がっていたが、近年コンクリート化が進んでしまい、そこで生息している生物にとって尾無の湿地は、残された重要な場所である。

生物多様性の価値

価値（3）里地里山といった二次的な自然環境に特徴的な生態系が存する場

【場の概況】

申請サイトの湿地は、環境省が選定している重要湿地No.465の野依新池周辺のため池群に当たる湿地で、野依新池と植野池の距離約160mの間に存在し、トンボ類の希少種が数多く生息している。近年、周辺では農薬の散布等が進んだ結果、徐々に自然環境が劣化しておりトンボ類の個体数も減少している。申請サイトはの面積は広くはないが、草刈りなどの保全整備により、トンボ類が多く生息できている。

【主な植生】

ヒメガマ、イグサ、チガヤ、シロバナタンポポ・ハコベ・スギナ・ヨモギなど、特にヒメガマ、イグサ、チガヤの湿地性の植物が多く分布している。

【確認された主な動植物など】

＜植物＞
ヒメガマ、イグサ、チガヤ、シロバナタンポポ・ハコベ・スギナ・ヨモギ
＜昆虫＞
ベッコウトンボ、シオカラトンボ、ハラビロトンボ、ウスバキトンボ、ノシメトンボ、キイトトンボ、モノサシトンボなど



写真の説明：ベッコウトンボ



写真の説明：冬期のエリア風景

生物多様性の価値

価値（6）希少な動植物種が生息生育している場あるいは生息生育している可能性が高い場

【場の概況】

尾無の湿地は、種の保存法適用種であるベッコウトンボの成体にとって重要な生活の場となっているほか、希少なトンボ類や両生類の生息地となっている。

【確認された希少種】

種名：ベッコウトンボ　学名：Libellula angelina　Selys, 1883　環境省RDB：ＩＡ（CR）種の保存法
ライフステージ：成体
確認された年月：1990年代から2024.4.14　調査手法：目視調査、ラインセンサス
調査地点：申請地　尾無の湿地



写真の説明：ベッコウトンボ

生物多様性の価値

価値（8）越冬、休息、繁殖、採餌、移動（渡り）など、動物の生活史にとって重要な場

【場の概況】

ベッコウトンボの成体の生活の場となるチガヤなどの枯れた草地が野依新池と植野池の周辺でどんどん少なくなっており、生存が脅かされている。その中で、申請地は両池の丁度中間に位置し、どちらの池からも移動可能で、貴重な生息地となっている。

【対象となる動物種とその動物種の生活史の内容】

種名：ベッコウトンボ　学名：Libellula angelina　Selys, 1883　環境省RDB：ＩA（CR）種の保存法
ライフステージ：成体
確認された年月：1990年代から2024.4.14　調査手法：目視調査、ラインセンサス

ベッコウトンボは浅いため池を好んでナワバリ行動、産卵を行う。産卵はおおむね4月から6月初旬に行われる。ヤゴは12月頃まで脱皮を繰り返して成長しそのまま春を待つ。翌年3月末から5月ごろまでに羽化し成体となる1年1世代型のトンボである。オスは羽化後1週間程度池周辺の枯れた草むらを好んで生活の場とし成熟を待ってから池に戻ってナワバリを張る。メスも羽化後近くの枯れた草むらで生活し、腹に卵が溜まると池に向かい交尾、産卵する。その後再び草むらに戻る。1～2ヶ月ほどの寿命の間に数回これを繰り返す。
このようにベッコウトンボの生活環の中で、池周辺の草地は成体の成熟、生活の場として重要な意味を持つ。



写真の説明：ベッコウトンボ（尾無の湿地）

サイトの活動計画・モニタリング計画

活動計画の内容	モニタリング計画の内容
現状は、整地する前（2015年頃）のような良好な湿地ではなくなっている。放置状態が長かったため、湿地の乾燥化が進み一部だけが湿地状となっている。これを数年をかけて、徐々にトンボ類や両生類が生息しやすい良好な湿地に戻すための作業を進めて行く。 　計画では、申請サイト内を大きく湿地と草地にゾーン分けを行い、湿地は一部地面を堀って小さな池を創出する。イグサやヒメガマなどの植物はなるべくそのままにして、希少な両生類の生活の場を確保保全する。草地はベッコウトンボが好むチガヤ畑とする方向で定期的な草刈りを行う。作業を進めるにあたっては、専門家の助言を得つつ実施する。 作業開始前に生物調査を実施して現状を把握し、5年間の期間内に数回モニタリング調査を実施する。 ベッコウトンボや希少な両生類については、毎年1回以上調査を実施する。	**【モニタリング対象】** ベッコウトンボなどのトンボ類 希少な両生類 **【モニタリング場所】** 尾無の湿地 **【モニタリング手法】** ラインセンサス、目視調査 **【モニタリングの実施時期及び頻度】** ベッコウトンボなどのトンボ類　4月～5月　3回以上 希少な両生類　年1回以上 **【モニタリング実施体制】** NPO法人 水辺に遊ぶ会 NPO法人 南港ウエットランドグループ 大分生物談話会 大分環境カウンセラー協会など